



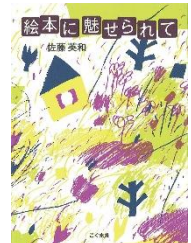
「西巻茅子」

にしまきかやこの「わたしのワンピース」(こぐま社、1969年)は、日本を代表する絵本です。2025年12月現在、210刷ですから(300刷を超える「ぐりとぐら」にはかないませんが)、間違いなく、日本を代表する絵本です。



その「わたしのワンピース」のことを「ぶんこだより」に書くこともあって、たまたま「わたしのワンピース」を持って、ぶらぶら街を歩いていたところ、少しお腹のふくらんだ女の人から「…わたし、その絵本好きなんです」と声をかけられてしまいました。びっくり「!？」だったのですが、なんとか「…え、どうして」と聞いてしまいました。返事は、「好きなんです。ずっと好きなんです」でした。

「わたしのワンピース」を出版している、こぐま社の佐藤英和さんが、その誕生のいきさつを書いた文章があります。「…『わたしのワンピース』のラフスケッチができていました。私は、一読して、すごくいい」と思いました。ところが、このラフスケッチをこぐま社へ持って帰って、ご意見番とも言えるべきブレーンの先生たちに見てもらうと、『お花畑を散歩したらワンピースが花模様になる? 雨が降ってきたら水玉模様になる? 佐藤君、これは絵本じゃないよ』とおっしゃるのです。」「…西巻さんはこのとき、すごくがっかりして『このおじさんたちには、絵本はわからない』と言いました」(「絵本に魅せられて」(著: 佐藤英和/こぐま社、2016年)より)。



佐藤さんは悩みます。

けれども、佐藤さんの決断で、「わたしのワンピース」はこぐま社から出版されます。「わたしのワンピース」は、第一場面から第二場面へ、更にその先へともものすごい飛躍のある絵本です。「…こんな飛躍をする絵本は、日本にはまったくなかったのです。しかし私は、海外のいろいろな絵本を見ていましたから、『これこそ絵本だ！』と確信しましたし、私は本当に悩みましたが、他の人がなんと言おうと、結局、これはそのまま出版しようと決めました。」(佐藤英和、前掲書)。

語り伝えられてきた「昔話」を、少なからず度外れた展開の物語の絵本であっても、読み聞かせてもらった子どもたちは、遂にはしんとなって耳を傾け、目を凝らします。

「わたしのワンピース」に飛躍があっても、子どもたちが、この絵本が大好きになるのは、年齢を重ねて、お腹がふくらむくらいの人になっても、「わたし、それ大好きなんです」と言ってしまうのは、たぶんその人がその「飛躍」の空間、時間の中で、思い切りそしていっぱい自分の時間、空想の時間を楽しんだからに違いありません。

ただ、それは、誰にでも、いつでもということではなく、たまたま、ある時たまたまその人に起こったのであって、必ず、誰にでもと言える訳でもないように思えます。

ただ、「わたしのワンピース」にたまたま起こっている「飛躍」が、より多くの子どもたちに、そんな時間が起こることになったのかも知れません。たぶん、この飛躍に子どもたちの飛躍の体験をあれこれ「説明」することは無理なようにも思えます。

佐藤英和さんとは、西宮にも、出向いて下さって、絵本の勉強会で、たくさんの事を教えてもらいました。そんな折に、誰かが、「佐藤さんのおっしゃる『売れ続ける』『再版される』絵本は、どうしたら生まれるのですか」と聞いたことがあります。佐藤さんの返事は「私にも解りません」でした。

「飛躍」ということでは、それを「わたしのワンピース」に負けないくらいやってのけているのが「キャベツくん」(文・画：長新太／文研出版、1980年)や、「きんぎょが にげた」(著：五味太郎／福音館書店、1982年)だったりします。

「キャベツくんが あるいてくると ブタヤマさんに あいました。『こんにちは』と、キャベツくんが あいさつをしました。ブタヤマさんは『フー』と いいました。かぜも『フー』と ふいて



います」「キャベツくんが あるいてくると」の始まりからして、「飛躍」しているのです。なぜ、キャベツくんはあるいているのか、何一つ説明がありません。初めて「キャベツくん」と出会った子どもたちは、たぶんびっくりしてしまいます。子どもだって、「なんで?!」と思ってしまいうに違いありません。しかし「キャベツくん」は、何一つそのことの説明、いきさつについては語りません。…で「ブタヤマさんに あいました」「『こんにちは』とキャベツくんが あいさつをしました」となります。たぶん、子どもたちは、このあたりでもう、この絵本に違和感がなくなる、と言うか、もうその世界に入り込んでしまっています。

大人にとって「何だ」と思うってしまうことを、心の広い広い子どもたちは作者がぶつけてくることを、そこに大胆な飛躍があればあるほど、すんなり受け入れるらしいのです。

問われているのは、子どもではなく、そんな「飛躍」を、子どもたちにぶつけられる大人・作者かどうかなのです。

常識の世界に、どっぷりつかって生きている私たち・大人には、いきなり「きんぎょが にげた」のような、発想・飛躍は、到底できませんが、長 新太や五味太郎のような、「異才（変人!）」にはそれが不可能ではないのです。もちろん、そんな「異才（変人!）」が、すんなり受け入れられる（子どもたちの絵本を選ぶ大人に）ことはありませんが、「何かの間違いで」それを子どもたちと読んだ時、子どもたちが食らいついて、そこから、「キャベツくん」や「きんぎょが にげた」の、子どもたちとその絵本の世界が始まったに違いありません。

結果、子どもたちは、とっても素敵なもう一つの世界を広げることになります。

佐藤さんが「わたしのワンピース」を出版するかどうか迷い、しかも発行した後にも、必ずしもすぐには受け入れられませんでした。結果的には、それを受け入れた子どもたちの力によって、210刷になったのです。

そんな訳で、絵本を選ぶ場合、〇〇刷は、子どもたちにとっていい絵本かどうかの目安にはなるのです。





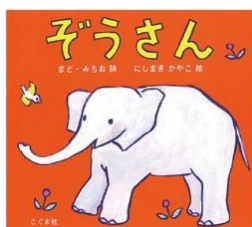
絵本とともに

～絵本とともに、子どもと歩む日々～



「ぞうさん」

(作・画：西巻茅子／こぐま社、2016年)



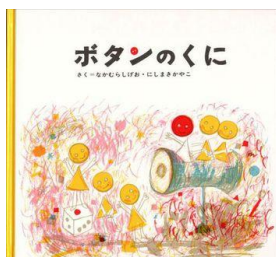
こうどうぶんこに来てくれている、1才になるかわいいTちゃん。Tちゃんが喜んでくれる絵本はどんな絵本かなあ…っと、思っていた時に見つけたのがこの絵本です。あの「ぞうさん」の歌詞が、西巻茅子のかわいらしい絵と共に出てきます。

ぞうさん ぞうさん おはながながいのね そうよ かあさんも ながいのよ
ぞうさん ぞうさん だあれがすきなの あのね かあさんが すきなよ

ただ言葉を読んでもいいのですが、やっぱり歌いたくなります。そこでTちゃんに読むときは、ページをゆっくりゆっくりめくりながら、歌いながら読むことにしました。喜んでくれるかな？楽しんでくれるかな？と少し心配しながら読み（歌い）はじめました。するとどうでしょう、その心配はどこへやら、にこにこのお顔で、体をゆらしながら聞いてくれているではありませんか。もちろん、Tちゃんのおかあさんも一緒に歌ってくれていました。2番の歌詞「かあさんが すきなよ」の場面は、親子のぞうが一緒にいる様子がページいっぱい描かれていて、背景は幸せのピンク色です。絵本と歌と、あたたかな時間が流れていました。

「ボタンのくに」

(作：なかむら しげお、にしまきかやこ／こぐま社、1967年)



ぬいぐるみのうさぎ、ぴよんの目のあかいボタンが取れてしまいました。あかいボタンはころころころころ転がって、落ちたところはボタンの国。そこで出会ったきいろいボタンの五つ子たちと一緒に、遊園地へ出かけることになりました。あかいボタンは、うさぎのぴよんのところへ無事に帰ることができるのでしょうか...

やわらかく、優しい色遣いで描かれたボタンの国に、自然と引き込まれます。登場人物である「ボタン」たちの表情は、素朴でとてもあたたかいです。

この絵本は、西巻茅子がつくったはじめての絵本です。あとがきにはこんな言葉がありました。

こぐまの“絵本おじさん”たちに、あっちこっちと舵を取っていただいたお蔭で、100日余りで、やっと絵本の形ができるところまでこぎつけました。そして、1枚の絵と、1冊の絵本というひろがりのある作品との差を、はっきりと思い知らされました。

「ボタンのくに」のできばえはともかく、《こぐま》というきまじめで、暖かで、良い絵本に対する執念のかたまりのなかで、わたくしの絵本作りができたことは、わたしにはとても幸せなことでした。

西巻茅子は、この「ボタンのくに」を世に送り出した後、2年後にはベストセラー「わたしのワンピース」を、同じこぐま社から出しています。作者と“絵本おじさん”が出会ったことによって、どれだけたくさん子どもたちや大人たちが、お話の世界を楽しむようになったことでしょう。

「まこちゃんのおたんじょうび」

(作・画：西巻茅子／こぐま社、1968年)

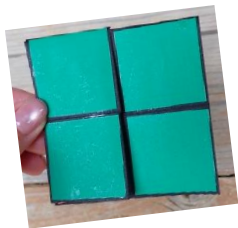


今日は、まこちゃんのお誕生日。まこちゃんは、「あかいぼうしはおじいさん あかいてりまきおばあさん あかいてぶくろおとうさん あかいブーツはおかあさん」と、家族のみんなからもらったプレゼントを身に付けて、スキップしながら散歩に出かけます。行く先々で動物たちに出会うのですが、なんとこれらのプレゼントが大活躍することとなるのです...

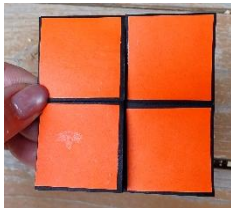
ぶんこの時間によく「お誕生日が近いのですが、おすすめの絵本はありますか？」と聞かれることがあります。まこちゃんの優しさがいっぱい詰まっていて、かわいらしい動物たちが登場するこの絵本を読んで、誕生日のお祝いをするのはいかがでしょうか。

今月のつくて!あそぼう!

平面ルービックキューブ



これは、ハマる～!

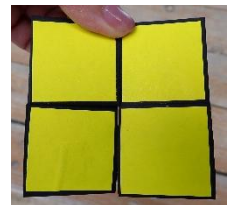


【材料】

黒画用紙 (15cm×15cm) 1枚

折り紙 8色 各1枚

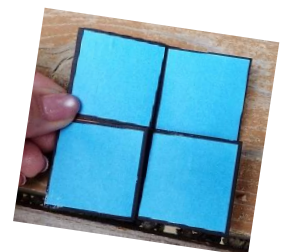
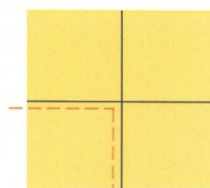
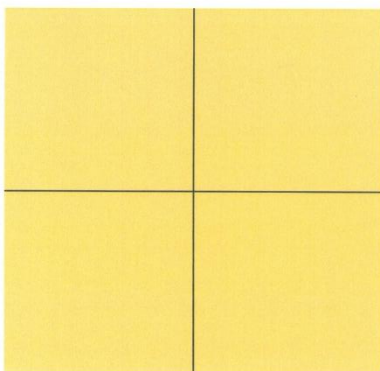
のり・はさみ



【作り方】

- ① まずは、折り紙を各色4分の1に切る。

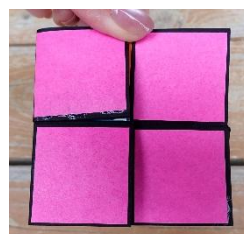
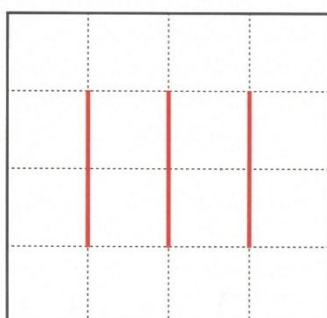
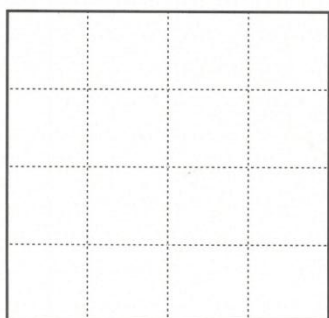
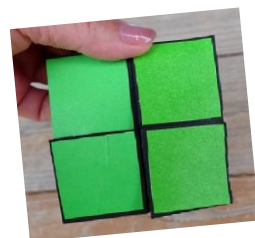
切った折り紙を、さらに4分の1に切る。その時に、少しだけ小さくなるように切る。(ほかの7枚も、同じように切ってください)



②折り紙サイズの黒画用紙を用意する。(1枚)

図のように折り線を付ける。(四角のますが、16個できます)

赤のラインのところだけ、はさみで、切り込みを入れる。



③下の数字を参考にして、同じ数字のところに、同じ色の折り紙を貼っていきます。貼る場所を間違えないようにね。

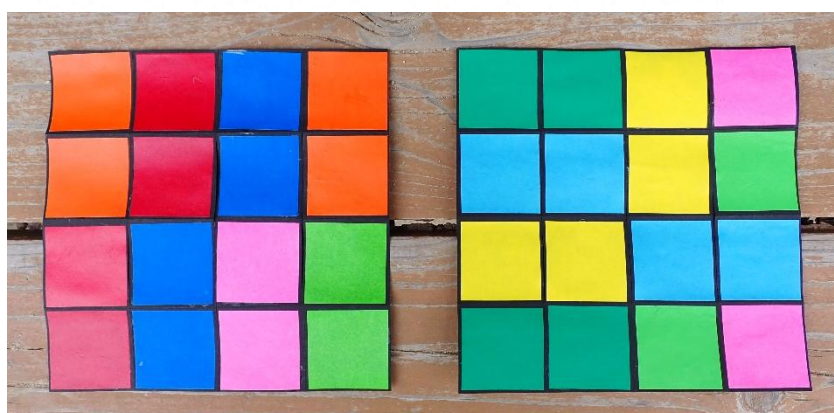
(表が貼れたら、裏も同じように、図を参考に、折り紙を貼っていきます)

表

1	2	3	1
1	2	3	1
2	3	4	5
2	3	4	5

6	6	8	4
7	7	8	5
8	8	7	7
6	6	5	4

裏



出来上がり！

何個、揃えられるかな？

今月のわらべうた

♪ふうせんふくらまそ (手遊び)

①

ふうせん ふくらまそ

ふうせん ふくらまそ

②

あかい ふうせん

みどりの ふうせん

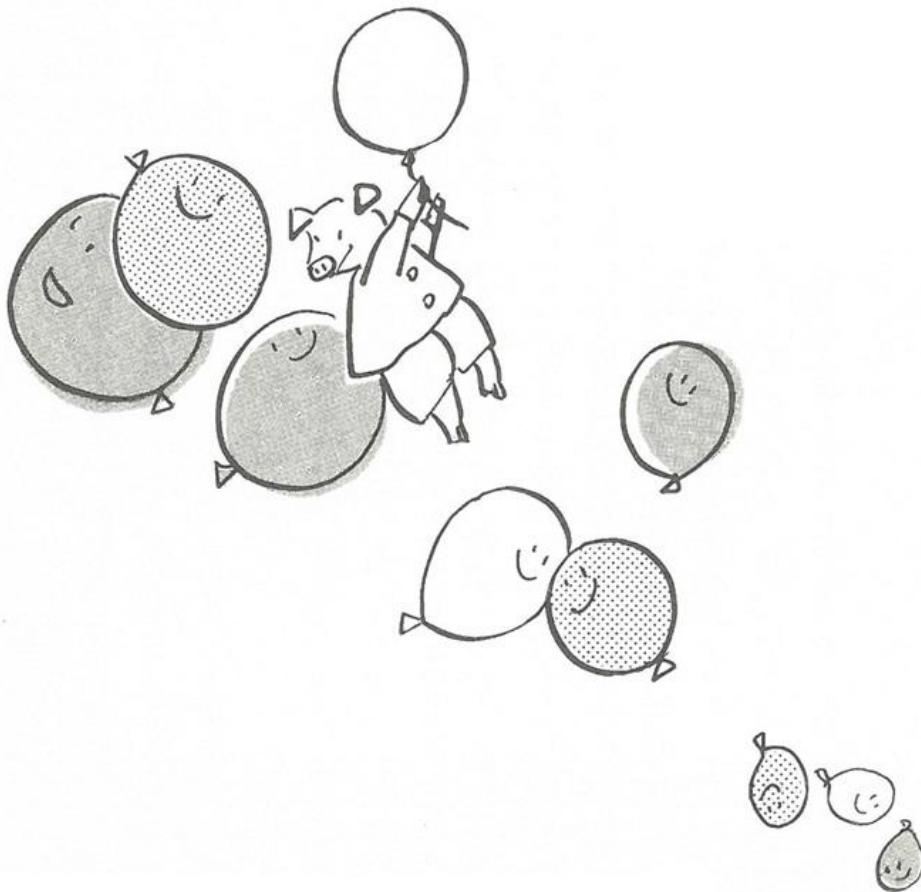
.....

.....

③

ふーッ! ふーッ!

ふーッ! ふーッ!

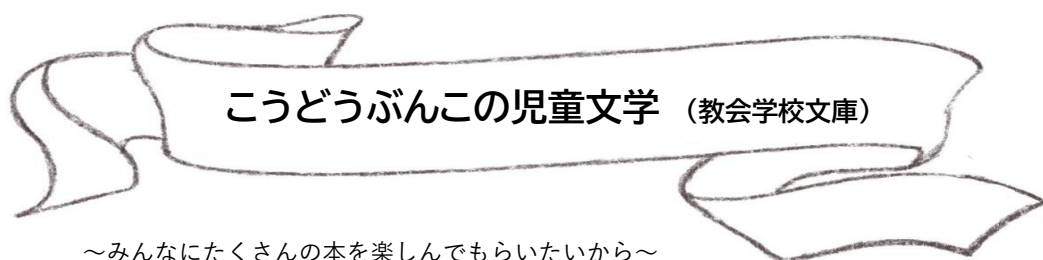


「おはなしのろうそく22」(東京子ども図書館編)より

♪ こどもとこどもがけんかして



♪ てるてるぼうず



「ふんふん なんだかいにいいにおい」

(作・画：西巻茅子／こぐま社、1977年)



表紙絵はお母さんと女の子。タイトルを読んで「きっと大好きなお母さんがいい匂いなのだろうなあ。」と想像を巡らせて読んだことを覚えています。初読から何年と過ぎ、今回再読。このいい匂いの正体は…お母さんではないのです！！思い出しました！！主人公のさっちゃんの口の周りの卵の黄身、手のひらのイチゴジ

ヤム、エプロンに付いた鳥のスープのシミの匂いなのです！！笑ってしまいますよね。大急ぎで朝食を摂ったが故のことなのですが、その理由は…。お母さんのお誕生日のためのお花を摘みに、大急ぎで野原へ行くためなのです。その道中、さっちゃんのお家へ行き朝食の残りを食べることになるのですが、さっちゃんがお母さんに抱っこされる姿を見て、それぞれがお母さんを恋しく思い帰路へ着きます。そんな中、おおかみだけが泣き出します。お母さんは小さい頃に死んでしまったのです。さっちゃんは「わたしのおかあさんかしてあげるから だっこしてもらったら」と言葉をかけます。ここで突然出てくる「死」。子どもがどこまでの理解ができるかは置いておいて、大好きなお母さんがいないということだけは感じ取るでしょう。そこから自分のお母さんを「貸してあげる」。そこには愛されている確信と大きな信頼があり、精神的安定があって成り立つことのように感じます。実は深いテーマを2つ持つこの絵本。きっと子どもは自分と置き換えて物語を感じることでしょう。初めて読む方は是非お母さんの読み聞かせで。それでこそ、このテーマにしっかり向き合えるはずです。

ちなみに我が子に幼少期の感想を覚えているか尋ねてみると「お母さんが死んでかわいそうだけど、私にはお母さんいるし、貸したくないって思った。言葉では言わないけど。」だそうです。これまた笑ってしまいました。感想はそれぞれ自由ですからね。

最後にちょっとした裏話…。この絵本、西巻家の子どもたちが幼かった頃にしていた「口からでまかせ話」の中で人気の高ったお話だとか。文章の方が先に出来た唯一の自作絵本だそうですよ！



こうどうぶんこ によこそ

「こうどうぶんこ」は、およそ 50 年前、石井桃子の「子どもの図書館」
(著：石井桃子／岩波書店、1965 年) に促されるように、教会礼拝堂の隅
っこに 2 本の本棚に絵本を並べて始まりました。

始めてみて、何よりも驚いたのは、読み聞かせする大人と絵本に、いわば
「我を忘れて」向かってくることでした。子どもは、絵本・本が大好きなの
です。

「こうどうぶんこ」は、「絵本・本好き」の子どもたちの力で続いてきました。

「こうどうぶんこ」によこそ！

「こうどうぶんこ」は、集まってくる子どもたちの絵本と児童文学の「お部屋」です。



1、会員になってください

「こうどうぶんこ」の会員になってください。登録だけで、入会金・会費は不要です。2025 年
より毎週水曜日（不定期で、お休みの時もあります）。

借りるのも、返すのも、午後 3 時～4 時 45 分まで。

2、ぶんこの部屋

「こうどうぶんこ」は、絵本の貸し出し（読み聞かせ）、朗読、わらべうた（マザーグース）、な
ぞなど、言葉であそぶ時間です。

3、1 度に借りられる冊数

1 人につき 5 冊まで。

4、貸出期間

2 週間

5、利用登録

本を借りられる方は、お名前、住所、連絡先などの登録をしてください。

6、お問合せ

〒662-0834 西宮市南昭和町 10-22

西宮公同幼稚園内 こうどうぶんこ

TEL : 0798-67-4691

FAX : 0798-63-4044

MAIL : koudou@gamma.ocn.ne.jp





こうどうぶんこ



日時：毎週水曜日 15 時～16 時 45 分

場所：ぶんこの部屋（西宮公会教会付属 西宮公会幼稚園）



July 7 2026

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20 海の日	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

August 8 2026

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11 日曜日	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

編集後記

私たちが編集・発行しています。ご意見や感想、お聞きになりたいことがありましたらお声かけください。

菅澤・濱・田場・金澤